天花
TENGE

山口県立美術館ニュース

第35号

昭和６３年３月１日
発行山口県立美術館

佐藤多持　水芭蕉曼陀羅　黄14

表紙作品解説

佐藤多持

1919（大正８）～

水芭蕉曼陀羅　黄14

紙本墨彩色　屏風４曲１隻　162.2×364.7　1968年

おなじようでおなじでない
おなじでないようで
おなじようで
くりかえしているようで
くりかえしていない
とまっているところの
ない　その瞬間のとまって
いる軌跡が次々に
弧をえがいて、
おなじ宇宙のようで同じ宇宙に
でない　転進が次々に
軌跡のみのこして

今がすでに
過去になり
未来が現在になり
現在は軌跡のみ
過去として終り
次に進んでいく

（『水芭蕉曼陀羅の詩』佐藤多持）

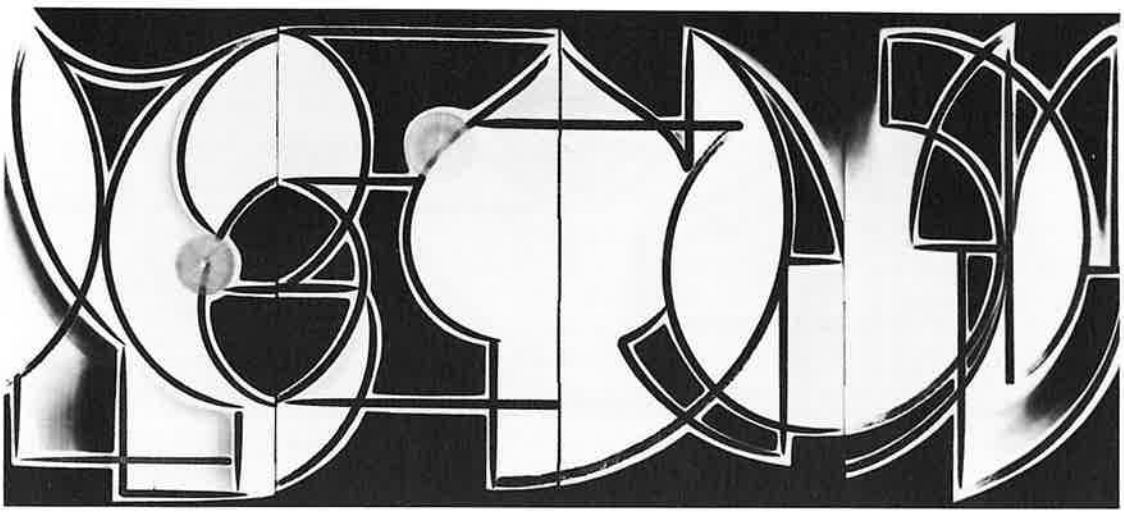
無限に存続しながら、変相を続けるもの。そのものは、定まること、くりかえすこと、とどまることがなく、永遠の連続性のなかに存在している。そして、その変転の軌跡が空間のなかで生まれ、弧を描き、やがて消え、さらに宇宙の輪廻転生の連鎖と円環のなかへとつながっていく。過去や未来、さらに現在という時間の観念さえも、置き去りにして。

佐藤多持は、「水芭蕉」をモティーフとしながら、それを単なるモティーフの枠以上の自らの思想と信仰に昇華しうる対象にまでつきつめたのであった。最初は徹底した写実から出発し、しだいに形体と色彩の面分割の変化のおもしろさへひかれるようになった。形象を解体し、再構成する過程を経て、線と空間がつくりだす運動とリズムの無尽蔵な展開を提示するなかに、心理的あるいは精神的な要素がもりこまれていった。

佐藤多持が「水芭蕉」を描きはじめてすでに三〇年以上が経過している。戦後まもなくの頃、東京美術学校の級友伊藤耕に案内されて、尾瀬沼の「水芭蕉」をみる旅にでかけたことが契機となった。「尾瀬に『水芭蕉』をみる旅行がなかったら今の私は何を画いていたか考えると胸が熱く、背すじを禅道場の警策でたたかれるような気持ちになることがあります。」と語る佐藤は、「水芭蕉」との邂逅の決定的な一瞬の喜びと衝撃を脳裏に深く焼きつけたまま、二度と尾瀬を訪れようとはしなかった。

この「水芭蕉曼陀羅」の画面の縦横にひかれる直線や弧線は、あくまで遅滞や逡巡をきらいながらも、理性の鋭さと感性のまろやかさをあわせもつ。さらにそれらの線の交叉、集中、拡散によって区切られる空間は、白地と黒地という強い対比をもって塗りこめられ、画面をよりいっそう鮮明なものとしている。その連綿と続く白と黒、そして線と面とのコントラストとヴァリエーションは、光と影、科学と神秘、生と死といった二元性を象徴すると同時に、われわれを形而上の世界へ導いてくれるだろう。

（菊屋吉生　学芸員）



視覚のミステリー

ルネ・マグリット展

ルネ・マグリット（一八九八～一九六七）の没後二〇年を記念した大規模な回顧展が、昨年から今年にかけて、ローザンヌ、ミュンヘンで開催された。今回の「ルネ・マグリット展」は、このヨーロッパの展覧会を基礎にして構成された、本格的な回顧展である。

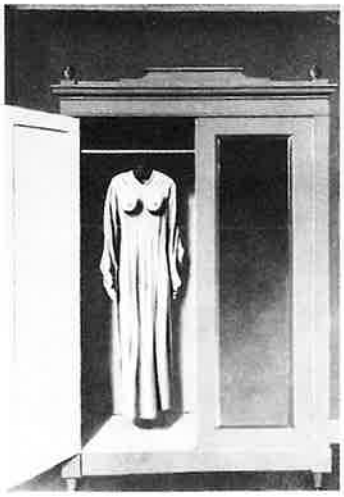
＊　＊

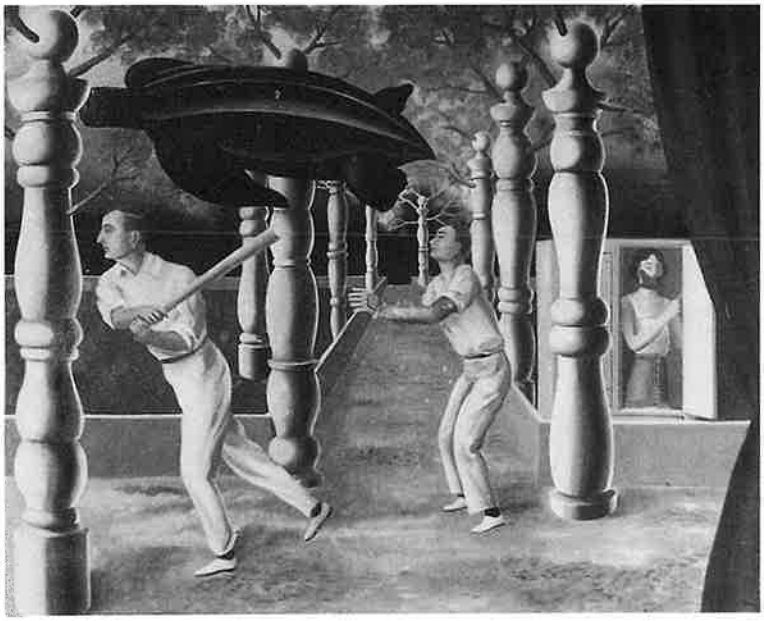
マグリットの絵画は、いかにも不思議な絵である。体が鳥籠になってしまった男。先端が人間の足になっている靴。血を流している石膏像。紙細工のように凹凸に折り曲げられてしまった青空。割れた窓ガラスに焼き付けられた風景……個々のモティーフそれ自体は、日常的な生活の範囲の中ででも十分見出せるものが多い。海、山、岩、男に女、樹木、窓、テーブル、コップなど。ただしこれらのものが、非現実的な空間の中に置かれて、あるいは、非現実的な在り方をして描かれている。彼の作品の前に立つと、われわれのまなざしは明確な意味を読み取ることができず、奇妙な空間を虚ろにさまようばかりである。

ところでわれわれが絵画作品を眺める場合、そこでは、既に設定されている一定の枠組みといったものが認められる。たとえば、ゴッホの激しい画面に彼の歓喜や狂気を見てとるように、画家がその対象を描きながら彼自身の内面に高揚してくる熱い思いが、少なくとも画面に垣間見られるはずだという前提である。近代における芸術についての様々な反省において、絵を描くという行為そのものが、われわれと疎遠になってしまった外界の対象を再び獲得せんがための行いとみなされていたのではなかったか。そしてこうした行為の表裏一体の一面として、自己表出という内面の表現も考えられていたのではないか。そもそも表現（express, Ausdruck）とは自己の内部から外部へと（ex, Aus）何かを押し出すこと（press, Druck）である。画家自身の個性を最大限に尊重する時代に、個性的な描きかたで自己の内面を表現した画家には惜しみない賛辞が贈られる。ピカソが、自分は抽象画を描いたことはないと言い続けた事実も、彼の作品そのものがピカソという個性を通して獲得された現実だという解釈のもとで、十分に理解できることであろう。

ところがマグリットの作品は、こうした近代絵画の前提にそぐわない何かを持っているのではないだろうか。絵を描くという緊張の行為の末に画家たちがやっと獲得したあの現実といったものが、彼の作品にあるだろうか。むしろ現実感の喪失した物体があるだけではないだろうか。窓から入ってくる明かりと外界の眺めを遮るものであるはずのカーテンが、荒野に樹木よりも巨大に林立している絵。衣装ケースの中に吊られているドレスに、乳房がそのまま浮き出している絵。マグリットが極めてリアルに個々の対象を描いているにもかかわらず、逆にそれらはリアリティーを欠いたものとなっている。

「マグリットは、ものからあらゆる意味を剝ぎ取ってしまい、ものの象徴的なあらゆる関係を拭い取ってしまう。彼の描く対象は、そのものの背後にあるものや、また他のものためにあるのではなく、ただそれ自身のためにあるのだ」（W・シュミート）。そういった「もの」を描くとするならば、ものについてまわるリアリティーを自分なりに表現しようという意図が現れてくる余地はない。したがって、自分がリアリティーを獲得するために追求しなければならぬ個性的な表現を身につける必要もない。事実、彼自身、物事に対する個人的な好みに左右される描きかたを放棄し、個性を越えたある普遍的なスタイルで描こうと決めたと述べている。普遍的スタイルとは、近代の画家たちが追及した極めて個性的な表現と対立するような、伝統的な写実的スタイルのことであろう。





▲マック・セネットの思い出に　1937
▶秘密の遊戯者　1927

確かにマグリットの描きかた自体には、とりたてて個性的なものは感じられない。

こうした一見何の変哲もないスタイルで、日常的な意味を剝奪した絵を描くということに、どのような意味があるのだろうか。歴史的に振り返ってみると、絵画の中から現実的な意味が消失してゆくのに決定的だった事件は、抽象絵画の誕生であった。カンディンスキーは、もはや絵画が日常世界を具体的に描写するのにあきたらず、抽象的な音の世界と同一な世界に入り込んだと考えている。しかしマグリットはカンディンスキーと違って、未だにりんごを描いている。それはただの円い形ではなく、やはりりんごである。だがそれは現実のりんごそのものというより、りんごを指し示している一種の記号とでもいえるようなものである。絵を描くという行為が、自分と疎遠になってしまった現実を獲得するためのものだというわれわれの前提からすると、マグリットの絵の中に描かれたものが、妙によそよそしく感じられるのは、まさにそれが記号でしかないことに基づいているのではないか。現実を描くという従来の絵画観を、抽象絵画のようにおもてだって覆さず、しかし従来の絵画観に亀裂を生じさせる。現実的意味を剝奪しようとして、かえって現実のものをリアルに描く。こうした逆説めいたところに、マグリットの作品が呈示する本当の意味があるのではないだろうか。

マグリットが、描こうとしたもの。それは彼自身が語っている。彼は、自分の絵は神秘を表現しているものだと言う。ただし神秘とはいっても、既に何等かの哲学書に説き明かされている神秘ではない。「神秘の覆いを取ることはできないし、定義することもできない。神秘とは、全くただそうであるにすぎぬものなのだ」と彼は語っている。ただそうであるにすぎぬ神秘とは、一切の日常的論理の体系による基礎づけを拒むものであって、それはまさにただ「神秘」としかいいようのないものなのかもしれない。したがっておそらく作品につけられた題名さえも、われわれに理解できる言語でこの神秘を説き明かしたものではない。むしろ題名は、「神秘」の共鳴板としてのはたらきをなしているものであって、「神秘」の余韻を響かせるものであろう。

「われわれは、ただ神秘を呼び出

▶不思議の国のアリス　1942
▲凌　辱　1948
◀追憶Ⅱ　1948
◀イメージの裏切り　1948

すことができるだけである」と彼が言っているように、「神秘」は、ただこの作品が存在するからこそ、そこに呼び出されて、そこに現れているにすぎないのである。

作品の中にのみ存在し、背後に何も持たず、ただそうであるだけの神秘。こうしたものとわれわれはどう向かい合えばいいのだろう。神秘としかいえないものを絵画の主題に選ぶマグリットを、ある人はかれの敗北と呼び、また、ある人は彼の絵には何も無いと言うだろう。絵画作品に芸術家の内面的な要因だけを認め、われわれ鑑賞者も芸術家の体験を追って、追いつくことで満足する枠組みの中にいる限り、マグリットの作品は、無意味で滑稽な戯れにすぎぬものとみなされるだろう。しかし考えてみれば、こうした枠組みそのものが、近代の限界を持った見方ではないだろうか。この枠組みが美術を見る唯一の絶対的な観点でないことは明らかであるし、また現代芸術に接する場合にさえ、その枠組みは既に用をなしていないかもしれない。マグリットの絵画は、われわれが抱いている絵画観そのものを反省させている。と同時に、地に足がついているような現実の感覚とあまりにもかけ離れた記号体系、つまり一億分の一というような時間、大きさの単位などを基礎にして現象の本質に迫りつつあると信じている、科学的な思考の支配する現代という時代の真の姿を、密かに切り開いて見せているのかもしれない。

いずれにせよ、それはわれわれとマグリットの作品の出会いにおいて生じるべきものにちがいない。今回の展覧会に展示される彼の作品は、代表作も含まれる極めて質の高いものである。マグリットの真髄に触れることも可能なこの機会に、われわれは彼の呈示しているあの「神秘」と、どこで出会うことができるだろうか。もし、幸運にも出会うことができたならば、それはマグリットの世界に入り込んだことの証なのかもしれない。

（斎藤郁夫　学芸員）

会期＝4月8日(金)～5月15日(日)
月曜日休館
観覧料＝一　般九〇〇円(七〇〇)
高大生七〇〇円(五〇〇)
小中生四〇〇円(三〇〇)
＊（　）内は20名以上の団体、
または前売り料金

特集・建築1

奇妙なる風景

今井　徹也

「ウォッチング」

最近、たてものウォッチング、町並みウォッチング、という行為が、静かにはやりつつある。路上観察学と名づけている人もいる。それぞれが興味のある、また関心のある町の中をほっつき歩きながら、不思議なたてものや、そのおかしげなる断片を見つけ出し、あとで仲間同志語らう。たてものだけに限らず、径や道路、そしてそこにある下水道のマンホールや、電信柱、門や塀、柵等。

間口は20数メートルはあろうか？二階建ての住宅らしきたてものがある。奥行きはわずか2～3メートルである。居室がどのようになっているのか皆目わからない。不可解なるたてものであり、光景でもある。

古ぼけた倉庫らしき二階建ての建造物がある。前面道路に面して、外部階段が設置されている。よく眺めると、その階段を上り切ったところには、ドアーがない。二階部分に入るべき連絡通路もない。階段上部の近辺に出入口用のドアーがなければならない理屈は別になかろうが、これまた不可解なる光景ではある。この場合階段は、時間の経過と共に、すでに階段の機能、用途、そしてその意味を失い、単なる段々に変質してしまっている。ウォッチングの場は、どういうわけか下町や町家が多いようだ。ウォッチャーの姿は、大抵背広やスーツを着ていない。なんとなく古ぼけた服装をしており、終戦後のヤミ市時代を思わせる格好の者が多い。中年の輩が多い。肩には必ずカメラをぶら下げている。

時折町をウォッチングするのは、仕事の気分転換にはちょうど良い。何かを見つけ、ふと佇む時の快感は何ともいえぬ。そしてウォッチャー（建築等に関心のある者、プロの建築家、建築史家等いろいろである）の姿を、観察（ウォッチ）するのもまた楽しい。

ウォッチャーの目は、アノニマスなたてもの・町・町並み・環境等から、何かを探りだし、何かを逃さない。その見つけ出された事象は、「時間の経過と人間の営みとの関係」を認識させてくれる。ウォッチングは何かを捜す行為であり、目的を持って行動するところにその意味がある。

私はウォッチングをしている意識がまるでない時、ある時は徒歩で、時には車や列車の窓から、予期せぬ光景に出くわすことがまれにある。それは大抵アノニマスな空間である。モノが包まれ、覆われた空間がおもしろい。とりあえずここでは、表皮空間とでもしておこう。

「表皮空間」

仕事場の目の前に山口地方裁判所がある。まぎれもなく現代のたてものである（現代建築といえるのかどうかは別として）。全面モノトーンのタイルが張りあげられ、正面ファサードはサッシュで強調されたデザイン、一層目の階高はやや高く、地上三階建ての鉄筋コンクリート造である。

ある日突然、そのたてものは、巨大な真白い直方体に変化していた。ホワイトボックスとでもいえようか？　場ちがいな巨大なお豆腐のようでもあった。日頃見なれていた建造物であったからこそ、よけいにその変様に驚いたものだ。山口市のド真中に舞い下りた、都市の柩のようにも見えたものだ。種あかしをするならば、なんということはない。地裁の改修工事の為に、白い防護用幕でたてものが何日間か、すっぽり包まれていたに過ぎない。今、はやりのインスタレイションを感じさせる何かがそこにはあった。

山口の国道九号線に現ＮＴＴビルがある。中高層で、各階に規則的に窓があり、ガッチリとしたビルでもある。ある日ギョッとした。ビルの屋上に、巨大な、まっ黒な、お化けのような物体がいるではないか？恐らく、数10メートルのモノであろうか？　何かが仁王立ちになってみえる。そのモノの重量でビルが潰れそうにも見えるが、ユーモラスにも感じられる。そこには何ともいえない奇妙な、おかしげな風景があるのだ。しばらく見ているうちにやっと気がついた。ビルは屋上に通信用のタワーを構築中であり、その防護用シートが私を驚かしたのだ。通常のネットフェンスであったならば、その中味は透けて見えたにちがいない。

今の風景

奇妙なる風景

日常的なる風景

またその黒い色彩が、なおさらその鉄塔の素材感を消失させてしまったようだ。モノが覆われると、その中味の本質は変化しなくても、見ようによっては全く別のモノになってしまい、周囲の空間までをも変質させてしまう。視覚伝達における様相のおもしろさである。その場合、ある一定の距離からモノを見るほうがおもしろい。近接しすぎると、そのディテールが見えすぎてしまうからである。

以前から、海岸線の岩山や島、自然を包み込んでしまう芸術行為があった。クリストさんというアーチストであったと思う。このアーチストの作品を観て一番驚いた人びとは一体誰であったのだろう。覆いつくされる以前の自然を毎日、毎日見続け、知り過ぎていた、その土地の人びとであろうと私は思う。

国道二六二号線上の防府市入口に新しい郵便局ができた。その傍に道路公園がほぼ完成した頃のことである。車の中から見ると、その公園に奇妙な物体が数十個ならんで立っている。黒いモノたちが—。高さは10メートル前後であろうか？　形は不ぞろいではある。一斉に動き出す気配を感じさせ、生きもののようにも見える。新しいできたてのホヤホヤの公園空間が異様な物体で占拠されてしまった。多少なりとも気味の悪い光景であった。通り過ぎること約数分、やっとのこと、あのモノ達の中味が判ったのだ。公園を構成する樹木なのである。植栽養生用シートがその犯人であった。

＊　＊　＊

仕事柄、建築工事の進行中を観察し、施行者に適正な指示をする機会がある。この作業を私達の世界では、監理と呼ぶ。仕事上からの義務とはいうものの、この観察の時点でゾクゾクする程の快感を味わうことがときにはある。このシーンを、進行空間と勝手に名づけてみよう。

「進行空間」

建築を施行する際に、杭を打ち込むことがある。この時に、二重のスリルを感じることがある。一つは、杭が適正な深さで止まってくれるかどうかということである。これは全く技術の世界の問題である。他の一つは、やや異なる世界のことである。まず杭を地上に刺す。前もって一定の深さまではドリルで掘ってしまうので、一定の深さまでは、スルスルッと土中にはまり込む。ことは、このあとからはじまる。落錘で杭を叩く。震動が地上におこりながら、杭はブスッ、ブスッと土中にめり込む。と同時に、砂や砂レキ混じりの流動体が、落錘の重量に反応し、地下からモコッ、モコッと出てくる。一方がめり込むと同時に一方は出てくる。そのさまを凝視していると時を忘れる。みるみるうちに流動体の集積は、おもしろい形態をつくり出す。私には、瞬間の造形、瞬時の空間として見え、なんともいえぬ快感を覚えるものだ。時間を含み込む、この進行空間を表現する方法には何があるのであろうか？　ストップモーションのジャンルである写真ではどうも無理なようだ。絵画や彫刻では、なおさらむずかしかろう？　ヴィデオでは可能かもしれない。しかしあまりにも即物的すぎるようだ。そうこうしているうちに杭工事は終ってしまう。そして、建築も地上にその姿をあらわし、完成に近づく。この視覚上の快感の程度は、どうも自分の仕事に関与しない場に接する時の方が高まるようだ。

建築の工事は、いつ見ても変化があり、おもしろい。私は特にその様相を三つに分けたい。

一つは、建築の組立て作業中の時

期である。鉄骨造の柱、梁の仮組みの時である。空中を動きまわるオレンジ色の防錆塗装された材と、バックの青空とのコントラスト。部材が露出した構造体。ときには、動物の骨のように有機的でもある。

二つは、建築工事の防護用外柵や幕をいっせいに取りはずす瞬間である。予想していた建築の形態の全体像が現実に見える瞬間でもある。

三つ目は、建築の解体時である。各部材が時間とともにはずれていく。同時に、その立体の残部が徐々に減少していく。全ての部分が刻々と変化し、消失していく。その姿は、予想不能の形態でもある。

建築は、時とともに変貌していく。その集積体である町や都市にも同じことがいえよう。その過程を観察することにより、何かを見つけ、ある時は発言し、構想し、何かを創り出す行為を、多くの人びとが素朴にやりはじめるならば、環境の空間要素としての建築・町・街・都市……は、より豊かに、よりダイナミックに、そしてより楽しくなっていくであろう。

一九八八・二・二二（建築家）

特集・建築2

街並み・都市計画考

―山口県の場合―

熊野　稔

街並とは、街路を中心にみた市街地の形状のことであり、最近では、古い建築群を指した歴史的街並を表わすことが多くなった。

一方、都市計画とは、都市計画法4条によると、「都市の健全な発展と秩序ある整備を図るための、土地利用・都市施設の整備・市街地開発事業に関する計画をいう」とある。いわゆる行政レベルでの事業のイメージが強いが、この街並の形成が都市計画の枠組の中で形づくられてゆくのはいうまでもない。

今日、山口県の街並や都市計画は、大きな岐路にさしかかっているといえる。それは、21世紀までの国土計画の基本となる第4次全国総合開発計画の策定に伴い、いくらかの県をとりまく諸相が変わってきていることに起因する。四全総でいう多極分散型国土の構築と交流ネットワーク構想が山口県にとって何を意味するか。ここでいう極とは、広島や北九州・福岡といった、いわゆる地方中核都市であり、この極のより魅力ある都市や基盤整備の充実を意味している。

こうしたより魅力化した極を、山陽自動車道といったような高速交通の基盤整備を行う交流ネットワークの充実により、より早くより堅固に結んでいこうとしている。

10万人前後の人口規模をもつ中小都市の分散型配置構造をもつ山口県にとっては、どのような影響があるか。

山陽新幹線や東北新幹線ができて、商圏の大きい都市は小さい都市からの商圏人口の流入をみるようになった。盛岡から仙台まで買い物に行くといった実情である。いわゆる磁場の大きい都市が周辺の中小都市から人口を吸いとるストロー効果の影響が、四全総のマイナス効果の一つとして考えられないか。

人口が減少している都市は活力や魅力も減少していくといわれる。

こうした意味からも、山口県14の諸都市は、より効果的な都市計画により、魅力ある都市に市民が育てていかなければならない時期といえる。

また、県内には、魅力ある歴史的街並がいくつか存在する。萩市の堀内・平安古の重要伝統的建造物保存地区をはじめとして、柳井の古市・金屋伝統的建造物群保存地区・長府や山口の歴史的町並といったものがある。こうした街並は、単なる観光資源だけでなく、街のＣＩＴＹ・ＩＤＥＮＴＩＴＹとしての大きな資産価値となり、そこに生れ育った人たちの原風景となり、そこに住む人たちの誇りとなりうることもある。

萩や柳井の場合は、法によって保存が保障されるが、山口市竪小路地区等、その他の歴史的町並にとっては、近代的なビルが建ったり、駐車場が古い家並みを歯抜け状態にし、貴重な歴史的景観の破壊が進んでいる。もっとも、地域デザインのあるべき姿は、地域住民の総意にもとづくものでなければ意味がない。人それぞれに価値観や美的感覚も違い、まとまるのは難しいかもしれない。

しかし、専門家の目から見ると惜しい気持ちがするのはよくわかる。

飛騨の高山市などは、一人当たりの小売業販売額が非常に高い。これ

柳井市の古市・金屋伝統的建造物群保存地区

は周辺の商圏人口の核であることと、美しい街並みのたたずまいに魅かれての観光客収入によるものである。

こうした背景として、高山市では、都市景観向上に寄与した優良建築物表彰制度や、まちの個性・景観を大事にしたデザインのガイドラインを作っている。当市では、民家の新築や建てかえ時に、建築デザインのガイドラインに沿って建築し、高山のまちなみらしさに貢献している民家が数多くみられる。

こうした官民一体となった協力体制が観光客をよび、街の財政に潤いをもたらす引金になっている。

徳山市の徳山港線

大勢の人々が街に来てくれることは、全国的にその街が有名になり、街により一層の誇りを持つこともできる。

山口県の歴史的町並の場合、まずは地域住民の合意のもとに、建て替える時に地区の歴史性を少しでも考慮するとか、看板や自動販売機、電話ボックスといったサインやストリートファニチャーを町並の雰囲気になじんだデザインにするなど、できる所から手をつけ、全体に広げていく工夫が大事ではなかろうか。

ところで、街並といっても、歴史的なものだけとは限らない。今日では、新しい都市デザイン手法をとり入れた近未来型街並も数多く現われてきた。

建設省が選ぶ62年度の「手づくりふるさと賞」に県内から徳山市の「東川緑地公園」、光市の「虹ヶ浜なぎさへの道」、山口市の「後河原一ノ坂川ホタル護岸」の三ヶ所が選ばれた。

東川緑地公園は、市が58年度から公園緑地整備事業として植栽や遊歩道づくりなどを進め、自治会などでつくる「東川鯉を守る会」も河川の清掃をしたり、コイや白鳥を放したりしている。

なぎさへの道は、アメニティー・タウン（快適環境都市）づくりを進めている光市が60年から白砂青松の虹ヶ浜の景観に合わせて松並木を整備し、JR光駅から虹ヶ浜にむけてのアプローチをより快適にしている。拡幅した歩道にはタイルを使ってさざ波の形をデザイン。木製ベンチや街灯、ステンレス張りの公衆トイレを設けている。

一の坂川ホタル護岸は、山口市の一の坂川の河川改修工事に合わせて県と山口市が47年から3年計画で整備した。左右約五七〇メートルの護岸の水辺に、柳、ヨモギ、カンスゲ、セリなどを植え、ホタルの生息しやすい環境をつくった。これに合わせて天然記念物のゲンジボタルを毎年放流し、絶滅寸前だった一ノ坂川のホタルをよみがえらせた。地域住民も一ノ坂川風致保存協議会を結成し、草刈や一斉清掃をするなどホタルの育成保護に努め、ホタルを通じてのコミュニティ活動がある。シーズンには約7万人の見物客が訪れる。

その他、県内の街並デザイン整備を概観すると、岩国市では吉香公園周辺、柳井市では駅南側の古開作土地区画整理事業によってできた歩行者専用空間のタップモール、駅北側でのポケットパークづくりである白壁ふれあい広場の整備計画といったもの。防府市では、商業近代化実施計画等によるカリヨン通りの商店街モール整備。宇部市では、商業近代化計画フォローアップ事業にもとづく興産通り・三炭町の再開発、中央銀天街のおしゃれの街づくり、琴芝駅通りの買物公園化、常盤通りのシンボル化景観整備、新天町名店街のアーケード新設と活性化、カルチャープラザ計画等がある。いずれも、隣市の大型ショッピングセンター・小野田サンパークに抗して、都心の魅力化、活性化を行うものである。

下関では、新都市拠点整備事業計画等に伴う海峡あいらんど21計画が動き出している。山口では、パークロードはもとより、県内初の電柱地下埋設化が行われた駅前スカイロードの整備等がある。街並みがきれいになると、着飾った女性の姿も美しくみえる。最近、山口の商店街では、ブティックの立地が増えた。

緑と文化のプロムナードとして市道三路線の整備を進めている徳山市。このうち体育館から文化会館前までの市道徳山港線六五〇メートルは、電柱を撤去し、歩道を拡幅して、みかげ石で石畳を敷いた。ところが、地中化に伴なうトランスボックス（高さ1メートル）が残されてしまった。ジャスミンのツタをはわせて市民の目から隠す試みもしているが、なかなか苦心せねばならない。これは電線地中化に伴う全国的な問題になっている。

このような県内の街並のさまざまなデザインを、全国画一化の風潮に流されることなく、それぞれの地域風土・個性に即した味わい深い、快適なデザインとするために、市民ぐるみでのさらなる議論が今後とも必要ではなかろうか。

（徳山高専講師）

特集・建築3

新らたな意識の確立をめざして

高田美規雄

絵画や彫刻の話しに比べれば、建築のそれは一層身近な問題を含んでいるため、より親しみやすいテーマであるといえるかも知れない。私たちの住まいは住宅建築として、職場は商工業建築として、役所や学校は公共建築として、さらには道路や都市機能の整備は都市計画としてそれぞれに分類されるように、建築は単なる箱のような存在なのではなく、私たちの日常を規定し、私たちの身体を包み込んで、生活そのものを展開させる場であると考えられるからである。小さな例でいえば、部屋の模様替えによって気分が一新されるということがあるだろう。部屋を構成する要素を少しだけ組み替えることで、どんなにか新鮮な気分をえられるわけだが、単にそれを機能的な問題と考えるのではなく、そうした小さな身体感覚の積み重ねの延長上に、建物や街づくりといった大きな空間にまでつながる意識や感覚があることをもう少し積極的に捉えられないだろうか。例えば、古いビルが取り壊されてサラ地になっていたりすると、ふだんは気にもとめていないその姿が妙に懐かしかったり、旅先の町のたたずましがさまざまな感興を引きおこしたりすることがあるだろう。それほど色や形、肌合からそのスケールまでを含めた全体として、建築は私たちの日常に深くかかわっているのである。

しかし、現実はどうだろう。世界一の経済大国といわれるわが国の一般住宅は「兎小屋」といわれ、首都東京をはじめとする各都市の街づくりは混乱を極めていると同時に、その無性格さがしばしば指摘されている。超高層ビルと貧弱な木造建築、高速道路と狭あいな裏通り――。そのギャップは、高度経済成長後にいたってようやく「量から質へ」の価値転換が叫ばれるなかで真剣に受け止められるようになったものの、これまでそのことはほとんど意識の片隅に追い遣られていたことではなかっただろうか。

例えば集合住宅を考えてみよう。いわゆるアパートは、古くは棟割長屋のようなものから、戦前の同潤会アパート、戦後の公団・公営住宅、近年のマンション・ブームまで、さまざまな形で展開してきたが、今日特に問題とされるのは、それらに対する考え方にかかわる点である。というのは、かつての集合住宅の位置づけはあくまでも仮住まい的なものであり、そこでの生活は旧来の生活パターンを大きく逸脱するものではなかった。それは例えば、親元から独立するなり、地方から出てきたために一時的に居住するための場所ではあっても、やがては郊外に移り住むことが前提と考えられていたし、地域の共同体に組み込まれることもなかったため、そのことによって地域自体が変化することもなかった。しかし量的にも集合住宅が大勢を占めるようになり、郊外への転出が事実上困難になってくると、集合住宅の合理性が改めて見直されるとともに、それは同時に集合住宅特有の問題を大きくクローズ・アップしはじめたのである。まず広さの問題、そして、設備や環境の問題、さらには、長期間にわたって居住するための維

持管理の問題というようなことが、ようやく表舞台で取り沙汰されるようになってきたといえよう。

ところでこれらの問題のうち最も注目されるのは、長期にわたってそうした空間に居住するための個人の意識の在り方に、徐々にではあるが変化の兆しがみえはじめたことである。かつての居住空間では敷地の境界でその内部と外部が区切られ、「自分の土地で何をしようと勝手」というような乱暴な側面があり、良質なところでも、いわゆる高級住宅街といわれるようなところに見出される趣味的な街路形成しかなかった。しかし、集合住宅の居住者が定着化するにしたがって新しいライフパターンが生まれてくるとともに、公私の区別も今までとは違ったものに変化せざるをえず、そこから公共空間に対する意識も変わってきていると考えられる。

例えばピアノ騒音のような問題は、それがかなりな台数に普及するまでは起こりえなかったことであるが、それが集合住宅にまで入り込んでくると、必然的に防音構造ということが考えられるようになったし、立体的に住む上での水漏れ対策、上下水道の管理、コンクリートの老朽化の問題などから、はては火事や地震といった不慮の災害などに対する対策も、居住者の定住化が進んだ結果、具体的に深められてきた問題であるといえよう。つまり、狭あいな道路は交通が不便であるばかりではなく、消防車が入れなかったりするなどの点でマイナスであるが、土地が合理的に処理されることによって生じるメリットは、空間の活用という最大の経済的価値を生み出したのである。

このとき、おそらく問題は住宅だけに終始するのではない。例えば、そうした住宅に住む人びとの職場は、事務や作業能率の効率化を目指してオートメーション化が推し進められることになり、そのことは当然タイムラグをおいて働く人びとの役割にも変化を与え、あるいは、そうした集合住宅周辺の商業地図を塗り替え、またその他の環境に変化をもたらせることになるだろう。

しかし、忘れてはならないことは、そのような生活のすべてを囲む建築群の変化の根本に、私たち人間が主人公であるという視点が欠かせないということである。いいかえれば、私たちの生活に不可欠なものは一体何なのかということをつきつめて考える必要があり、また真の豊かさをどういった点に求めるかを論じなければならない。

例えばロンドンは、世界でも市民一人当りの緑地面積の最も広い都市といわれている。市内随所に緑地が散在するのはもちろん、周辺も広大なグリーンベルトで囲まれているが、中には集合住宅に住む人びとのプライベート緑地も少なくなく、ここでは積極的に緑を生活に溶け込ませる姿勢が貫かれているといっても過言ではない。またローマでは、街自体が歴史的な遺構となっているため、近世の建物の下からローマ時代の遺跡が据り起こされるといったように、事実上再開発が困難な事情もあるが、むしろその歴史性を積極的に重んじており、単なる合理性の名のもとに歴史的財産を破壊することは、ほとんど考えられないといってよい。

一方アメリカでは、例えばシカゴでのように、産業構造の変化によって地域の住民がすっかり入れ代わってしまうことも珍しくなく、かつての高級住宅街が簡単にスラム化してしまうかと思えば、巨大資本によって一挙に再開発が実現可能にもなるテンポの早さを見せる。それほどではないにしても、19世紀末のパリで、近代的な都市の景観づくりと歴史的な伝統とをうまく調和させた都市大改造が実行されたことは、よく知られるとおりである。ユトリロや佐伯祐三の作品で知られるパリ風景が、人間臭さを失うことなくモダナイズされたその一部であることの意味は今日も変わりがないが、20世紀末にいたって、郊外のデファンス地区に超モダンな施設を集中する必要が生じたのも時代の成り行きかも知れない。しかしながらヨーロッパの各都市は、一般に規模もさほど大きくなく、その中で何を重視するかの議論が積み上げられてきている様子を実感させるようである。

おそらく都市の発展は、そこに住む人びとの生活に便利さを供給するばかりではなく、なんらかの不自由さを強いるものであろう。しかしその不自由さは、まさに都市そのものが大きな共同体であるからこそ生じてきたものと考えることができる。私たちの場合は、ほぼ一世紀をかけて近代化に取り組んできたわけだが、その目指すべき方向があまりにもそれ以前とギャップをもっていたために、結果としてあいまいな姿を現在曝け出しているといえるかも知れない。しかし、私たちの歴史が過去において他に誇るべき独自な文化を形

成していたとすれば、単に今日のあいまいな姿を否定するのではなく、それとは遥かに隔った地平に既にあることを充分に確認しながら、私たち自身の議論を展開しなければならないだろう。

確かに一方では、都市の機能は匿名性に基づくという議論はあるかも知れない。合理性を追求する日本車が、さまざまなネーミングにもかかわらず、どれも似たような形になるのと同様、都市の顔もある面においては、大差のないものにならざるをえないといえる。しかし、そこで私たちの生活が展開するということを考えれば、どこでもよいどこかに偶然にいるという消極性においてではなく、また狭い意味で自己の殻にとどまるのでもなく、まさに私たち自身の生活にふさわしい街が望まれるのであり、このとき、歴史や風土、地理的経済的条件も異なるそれぞれの地域は、そのことを無視して中性的な存在になるわけにはいかない。

いま私たちはようやくそのことに気づきはじめたといえ、その意味で私たちの真のモダニズムは、いまだ形成途中であるといわねばならない。

（高田美規雄　普及主任）

展覧会案内

20世紀美術 偉大な先配者たち

三月九日から四月三日まで、「二十世紀美術・偉大な先駆者たち」展が開催されます。この展覧会は、世界的に著名な美術書出版者、テリアードのコレクションを、初めて公開したものです。今世紀の美術界で偉大な足跡を遺した巨匠たちの顔ぶれが一堂に会しているその内容には、非常に興味深いものがあります。

例えば、シャガールの「花束」、「恋人たち」、ルオーのカラー・グワッシュ15点をはじめ、ピカソ、ブラック、レジェ、ミロ、ボナール、ル・コルビュジェ、ジャコメッティなどの作品が展示されます。

彫刻、タピスリー、油彩、そしてテリアードが出版したリトグラフなど、多様な作品をとおして振り返る、今世紀最大の画家たちが追求したものを、十分に鑑賞していただきたいと思います。

会期　3月9日(水)～4月3日(日)

美術館この一年――展覧会

昭和62年4月―63年3月

●自主企画展

現代美術Ⅳ―今日の立体　5月19日～6月14日

松田正平展　10月3日～11月8日

日本画―昭和の熱き鼓動　1月7日～2月14日

●共催展

川原慶賀展　3月28日～5月10日

古代エジプト展　6月27日～8月2日

マチス展　11月20日～12月27日

●県美展

第41回山口県美展　9月9日～9月25日

●貸館による展覧会

現代工芸展　8月5日～8月9日

第40回山口県学校美術展　11月12日～11月15日

山口大学卒業制作展　2月18日～2月21日

二紀会展　2月23日～2月28日

山口芸術短期大学卒業制作展　3月3日～3月6日

■移動美術館

美と出会うとき

上関町会場　11月12日～11月16日

田万川町会場　11月19日～11月23日

美術館から

〔第一常設展示室〕

●絵画展示室（香月泰男）

シベリア・シリーズⅤ（～3／13）

シベリア・シリーズとエスキース（3／15～）

●絵画展示室

山口の水彩画家たちⅠ　河上大二（～3／13）

小林和作の世界（3／15～）

●郷土工芸室

現代の陶芸（1／19～）

〔第二常設展示室〕

山口の近・現代彫刻（2／19～）

山口県立美術館ニュース
「天花」　第三五号
昭和六三年三月一日発行
発行　山口県立美術館
〒753 山口市亀山町三―一
☎〇八三五―二五―七七八八
印刷　瞬報社写真印刷株式会社